

博士学位論文審査要旨

2014年7月16日

論文題目：「天狗説話」の研究

学位申請者：久留島元

審査委員：

主査：文学研究科 教授 廣田 收

副査：文学研究科 教授 植木朝子

副査：文学研究科 教授 藤井俊博

要 旨：

従来「天狗」という霊格は「鬼」「霊」などと並んで、専ら民俗学において考察されてきた。本論文は、国文学の立場から、「天狗」という語を手がかりに、天狗の登場する説話を「天狗説話」と捉えるだけでなく、歴史資料や絵巻の絵詞などの資料も含めて、「天狗」に関するすべての言説を「天狗説話」と据える。すなわち、天狗説話を天狗の言説史として描くことを企図したものである。

本論文は、まず対象とする作品を、①古代から院政期、②院政期から鎌倉前期、③鎌倉後期から室町期と三期に分割し、それぞれ第一章から第三章として考察する。重要な論点は、天狗が反仏法的存在と捉えられてきたことを、古代仏教説話における認識であったと指摘したことである。さらに、院政期から鎌倉前期にかけて天狗は、雑多な悪神・悪霊に変化するという。さらに、鎌倉期から室町期に至ると、魔道の成立によって、天狗は仏法から排斥される対象ではなくなり、天狗を中心的存在とする娯楽的な作品が成立してくるという。本論文は、このような過程を、具体的かつ詳細に検証している。

同時に、本論文は、天狗が仏法に対して対立的に機能するだけではなく、天皇や神格に対しても対立的に機能することを明らかにする。すなわち、古代において怪異は国家・天皇の統治と命運を左右する兆しを意味するものであったが、鎌倉期の説話集にあって怪異は、不思議の出来事としての意義をもつに至ることを明らかにしている。

また第四章では、『是害坊絵巻』を取り上げ、諸本を渉獵するとともに構成を検討し、並行する説話集との比較を試みる。特に、名前や地名など固有名詞の機能の相違を指摘するとともに、絵巻が魔仏一如と良源信仰とにおいて独自性をもつことを解明している。また室町期の絵巻の特質が、芸能の影響のもと異形性よりも風流性と祝言性にあることを論じている。

是害坊伝説に関する近世期以降の考察は、今後の課題として残されてはいるが、本論文が古代から中世における天狗という存在を、天狗説話の表現の問題として考察したことは、国文学研究における新たな領野を拓いたことにおいて高く評価できる。また、本論文が、天狗説話の文学史を、歴大な事例と緻密な分析でもって構想したことは、国文学研究史上特筆すべきことであると評価できる。

したがって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2014年7月16日

論文題目： 「天狗説話」の研究

学位申請者： 久留島元

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 廣田 収

副査： 文学研究科 教授 植木朝子

副査： 文学研究科 教授 藤井俊博

要 旨：

上記審査委員3名は、2014年7月15日、午後4時45分から約2時間にわたって、徳照館1階会議室において、公開で、学位申請者に対して口頭試問を行った。

学位申請者は、提出論文について審査委員3名から出された研究内容に関するさまざまな質疑に対する的確に答えるとともに、専門分野における深い学識を示した。と同時に、本論文の研究水準の高さと学術的な価値を証明した。さらに、学位申請者は語学（英語）においても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 「天狗説話」の研究

氏名： 久留島 元

要旨：

「天狗」は、文学だけでなく、芸能、宗教、民俗など多領域にわたって扱われ、存在感を有する。これまでも「天狗」に関する考察は少なくないが、民俗学や歴史学が主流となってきた。そのため国文学の立場からみると、既往の研究は作品の文脈に基づいた「天狗」像の分析に不十分な点が多かった。

国文学の立場からも「天狗説話」への注目は早くからあったが、厳密な定義をともなったものではなく、天狗の登場する説話、物語を概論的に紹介するに止まっていた。従って、個々の作品でなぜ「天狗」が語られたのか、なぜ「天狗」像に違いが生じたのか、などの<表現>の問題として「天狗説話」が論じられることは少なかった。

また、従来の説話研究は全体的に仏教説話集が中心だったため、「天狗説話」の研究においても天狗の「反仏法的性格」が強調される傾向にあった。しかし、近年とみに説話研究の対象は広がっている。そのため、本論では近年の説話研究の動向をふまえ、「天狗」という語を含むすべての言説を「天狗説話」と定義した。

そのうえで、平安中期から室町期にかけて、説話集や古記録、教訓書、絵巻にあらわれる「天狗説話」をとりあげ、<表現>の問題として考察をすすめた。

「天狗説話」を<表現>の問題として考えるとは、「天狗」にまつわる言説について、それを語る<作品>内の文脈と、<作品>をとりまく<社会>の文脈との双方をふまえ、その重なりやずれについて意識的に考察することである。従って本論は、「天狗説話」を横並びにつらねた目録型の研究ではなく、個々の<表現>がもつ固有性について明らかにすることを目的とする。

以上の問題意識を有し、本論文では次のように考察をおこなった。

第一章では、「天狗説話」の研究史を本論文の問題意識にひきつけて概観し、問題点を整理した。

日本では「天狗」という語が漢籍や漢訳仏典を通じて到来し、独自の「天狗」像を形成した。中世には、主に仏教説話のなかで「天狗」が「魔」と同一視されて語られたが、漢籍の知識や修験の影響も加わり多面的な「天狗」像が語られた。近世にも国学者や文人たちによる考証が多くなされ、「天狗」像が普及した。

しかし統一的な、あるいは実態的な「天狗」像の研究では「天狗説話」は素材に過ぎず、説話個々の<表現>に対する分析は曖昧であった。<表現>に着目した画期的な論考は、昭和五十年代に森正人氏が『今昔物語集』の「天狗」を「反仏法的性格」と明らかにした論考である。説話研究では仏教説話集における「天狗説話」だけが重視される傾向があったが、近年は古記録や軍記研究の立場から仏教説話における「天狗」像を相対化するような視点も指摘されつつある。<表現>にもとづく個別的分析と、通史的な把握の双視点的研究の重要性を示した。

第二章第一節では、『台記』にみえる「天公」像の目に釘を打ち付け、帝を呪詛したという記

事を取りあげた。従来この記事は愛宕の天狗伝承の延長に考えられてきたが、「天公」は「天の神」をあらわす漢語であり、現在の天狗伝承と直接関連づけることはできない。「天公」は、実態はわからないが在地の「天の神」信仰をさしていたと考えられる。従って、むしろ都からの視点により、天にまつわる悪神や異端の信仰をあらわす「天狗」と同一視された、仏教説話集に取り込まれる以前の「天狗説話」として捉えられる。

第二章第二節では、『今昔物語集』巻二十に配置された「天狗説話」群のうち、第七話を取りあげた。染殿後にまつわる説話として知られる巻二十第七話は、標題と配列から「天狗説話」と捉えられるが、本文では後に愛執を抱く金剛山聖人が「鬼」になって后を悩乱したと語られる。『今昔物語集』は、原典にあった「鬼」を、国家秩序をおびやかし后に取り憑く〈憑霊〉の性格から半ば強引に「天狗説話」と読みかえていると明らかにした。

第二章第三節では、さらに『今昔物語集』巻二十第四話の分析を通じて、『今昔物語集』では「天狗」を、仏法が守護する国家秩序に反する「魔」と規定し、王権と「天狗」との関係を重視して巻二十の「天狗説話」群を編纂したことを明らかにした。

小括として第二章の論述をまとめ、改めて平安時代中期から院政期にかけて、悪霊としての「天狗」の認識が浸透していたこと、『今昔物語集』などの仏教説話集が積極的に「天狗説話」を取り込み「反仏法的」な魔物として規定したことを確認した。

第三章第一節では、日本における「魔」や「魔道」への関心を概観し、『扶桑略記』皇極四年条を取りあげた。『扶桑略記』では蘇我蝦夷は「大鬼道」に墮ち、斉明天皇の時代に数々の怪異をなしたという『日本書紀』にはない記述がある。『扶桑略記』の記述は死者の霊が現世に干渉する〈怨霊〉の概念が成立して以降の〈表現〉であり、死者が「魔道」に墮ちて現世に祟りをなす、という中世軍記などに語られる〈表現〉の先蹤と位置づけられる。

第三章第二節では、『五常内義抄』の瘤取翁説話を取りあげた。本話は『宇治拾遺物語』第三話の類話であるが、瘤を取られる側が「法師」、取る側が「天狗」、踊りが「田楽」となっており、相互に関連する〈表現〉を持つ。これらは説話が書かれた鎌倉初期の特色を反映した〈表現〉である。しかし『五常内義抄』は本説話を「隣の法師」の軽率な行動を批判する説話として構成し、「天狗」を排斥の対象ではなく、超越的な山の〈異形〉と捉える。教訓書という形により、仏教説話とは異なる「天狗」像が語られたと述べた。

第三章第三節では、『古今著聞集』巻十七「怪異」「変化」篇を取りあげ、出典である歴史書の記述から「神のさとし」としての文脈を切り離し、不可思議な事件としてのみ語る傾向を指摘した。「天狗説話」も、本来の社会不安の表象という文脈から乖離して他の「化け物」と同列に配され、古代とは異なる「天狗説話」の在り方が伺えた。

第四章では絵巻『是害房絵』を取りあげ、その構成と成立、展開、受容の様相を見た。

第四章第一節では、『是害房絵』伝本のうち最古本である曼殊院本の詞書と類話関係が指摘される先行説話集との比較を通じて、一四世紀に成立した『是害房絵』の特色を明らかにした。曼殊院本は、絵画表現でも詞書でも良源を重視し、悪行をなす天狗（魔）が湯治を経て護法へ転換する「魔仏一如」の論理を強調する。良源信仰は蒙古襲来以降に外敵調伏の目的で隆盛しており、曼殊院本は当時の社会背景を顕著に反映している。

第四章第二節では、『是害房絵』諸本の展開をさぐった。一四世紀成立の絵巻では「魔仏一如」の転換が強調されたが、室町期に作られた伝本では天狗たちの行列場面が「風流」の行列に見立

てられ長大化した。そのなかで祭礼や芸能の図像、連歌の付け合いにも似た即興の歌謡、延年の舞の図などを取り込み、一四世紀絵巻とは異なる祝言性を強調する絵巻として成長していった。

第四章第三節では、先行研究において「特異な一本」として諸本分類から除外されていた愛知教育大学附属図書館チェンバレン・杉浦文庫蔵『和漢天狗会話』をあらためて検討し、『是害房絵』伝本として諸本のなかに位置づけた。そのうえで絵巻『是害房絵』が、謡曲『善界』と深く関わりながら受容、製作されていたことを明らかにした。

以上、本論文では、媒体を超えて展開する「天狗説話」をとりあげ、個々の〈表現〉にもとづいて分析した。「天狗説話」の語られ方は、説話を語る作品、語られる時代、作品をめぐる環境など、各々の文脈に応じて変化するが、古代から中世にかけて通観すると、次第に仏教的な言説を離れ、「天狗」そのものへの関心が深まっていったということが出来る。

もともと漢籍から移入された「天狗」という語は、日本では「魔」と同一視されることで具体的な性質や造形を獲得した。仏教説話においては「天狗」は反仏法的な「魔」であり、調伏し、排除されることで仏法の威徳を証明するための機能的な役割を与えられていた。

一方、断片的に語られた多様な「天狗説話」を射程に入れると、「天狗」は、天や山にまつわる雑多な悪霊ないし悪神として、鬼やほかの化け物とも互換可能な存在だった。

天や山にまつわる雑多な悪霊という性質は「天狗」像の基底をなし、時代を超えてしばしば表出する。「天狗説話」は、反仏法的な「魔」の面と、雑多な悪霊としての面が相互に交錯しつつ、媒介を超えて展開する。そして「天狗」や、「天狗」の棲む「魔道」に対する関心が深まるなかで、絵巻や謡曲など「天狗」を中心に扱う作品が作られる。すなわち、「魔仏一如」などの仏教的言説を介しながらも、異形・異界へ関心が移るのである。

さらに異形への関心は装飾性、祝言性を求める室町後期の時代風潮とともに、娯楽性の高い作品群へつながっていく。かくて本論文では、古代・中世において「天狗説話」が語られた意義と、その変遷について明らかにした。

本論文では主に都市文化において展開した「天狗説話」を扱った。そのため各地域における「天狗説話」の分析には踏み込めなかった。近世・近代における「天狗説話」は、各地域で語られた「天狗説話」も前提として、都市で語られる「天狗説話」と各地域において語られた「天狗説話」の交錯を検討する必要がある。